

ピロリン酸カルシウム？

ながつか よしはる
長塚 義治

日本郵政グループ労働組合・書記次長

その痛みは突然やってきた。

昼過ぎに感じた右膝の違和感はその日の夕方に激痛と化した。歩くことすらままならない。これまでに経験したことのない痛み。2003年6月のことである。

3日間ほど続いて痛みが弱まったかと思うと、今度は左手首に激痛がはしる。見ると手首が赤く腫れ熱を帯びている。ネクタイを結ぶのも、ボタンを留めるのも至難の業。

その後も足首、膝、指、肩など、間髪を入れずに痛みが転位する。まさに身体中を駆け回る状態。最悪は足の付け根「股関節」の痛み。目が覚めて、なんとか上半身を起こすまでに10分間。もちろん歩くことはできない。ひたすら痛みが遠のくのを待つしかないのである。

病院の見立ては、「ピロリン酸カルシウム結晶沈着症」の疑いがあるというもの。調べてみると、別名「偽痛風」といわれ、「ピロリン酸カルシウムが軟骨に沈着して起こる関節炎」とある。痛風が尿酸結晶によって炎症を起こすのに対し、このカルシウム結晶が悪さをするらしい。医師は、「原因不明で決定的な治療法もないため、症状が出たら患部を冷やすしかない」という。聞き慣れない病名と、非科学的な所見に途方に暮れたが痛みは待ってくれない。

どこに現れるか予測できないが、しばらくし

て一定の法則めいたものを感じるようになる。症状が出た部位には再発しないこと、1つの痛みは3日間ほどで治まること、そして一度に複数の部位に痛みが出ないことなど。考えてみれば律儀な病気である。仮に同時多発ゲリラのように襲ってきたら、身体的な不自由よりむしろ精神的に追い詰められていたと思う。

痛みの転位は半年ほど続いたろうか。いや、ピロリン酸カルシウムが身体中の関節をすべて制覇するのに半年ほど時間を要したということか。ひとまず転位する激痛は治まったかに思えたのである。

しかし、この悪玉カルシウムは、関節を転位する際に時限爆弾を仕掛けたらしく、今度は手足の関節付近が腫れて膨張しはじめたのである。それまでの靴が履けない、トイレにうまく座れない、指先が思うように利かない、そんな日々が続いたが、発症から1年後に訪ねたある病院の処方によって、徐々に改善に向かい日常生活に支障がない程度まで回復し現在に至っている。

最終的な診断は「リウマチ」だが、個人的には「ピロリン酸カルシウム」の悪事だと思っている。問題は、どちらも原因が解明できていないことと決定的な治療法がないことである。今では治療法も進歩していると聞くが、一刻も早い完治医療を望むものである。